

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごもとおんふみ

四糸金吾許御文

新版
1626
ゝ
1629

しじようきんごもとおんふみ

四条金吾許御文

こうあん

ねん

弘安3年（'80）

がつ

にち

12月16日

さい

59歳

しじようきんご

四条金吾

しろこそでひと

わたじゆうりよう

た

そうら

お

白小袖一つ・綿十両、たしかに給び候い畢わんぬ。

とし

傾

そうろう

ところ

やま

なか

かぜ

激

あんじち

歳もかたぶき候。また処は山の中。風はげしく、庵室

籠

め

打

敷

もの

くさ

は

着

もの

紙

はかごの目のごとし。うちしく物は草の葉、きたる物はかみ

衣

み

冷

いし

しよくもつ

こおり

ぎぬ、身のひゆることは石のごとし。食物は氷のごとく

そうら

おんこそでた

そうら

み

温

に候えば、この御小袖給び候いて、やがて身をあたたま

思

みようねん

ついたち

書

そうら

かしよう

らんとおもえども、明年の一日とかかれて候えば、迦葉

そんじや

けいそくせん

籠

じそん

しゆつせごじゆうろくおくしちせんまんさい

待

尊者の鶏足山にこもりて慈尊の出世五十六億七千万歳をま

たるるも、かくやひさし久かるらん。

そうら

椎 地 しろう

語 もう そうろう

これはさておき候いぬ。しいじの四郎がかたり申し候

ごぜん ごほうもん

承

そうろう

世 清

御前の御法門のことうけたまわり候こそ、よにすすしく

おぼ そうら

おんひきでもの

だいじ

ほうもんひと

書 っ

進

覚え候え。この御引出物に大事の法門一つかき付けてまい

ろうろう

らせ候。

はちまんだいぼさつ

せけん

ちしや

ぐしや

だいたい

あみだぶつ

八幡大菩薩をば、世間の智者・愚者、大体は阿弥陀仏の

けしん もう そうろう

故

ちゆうこ

ぎ

化身と申し候ぞ。それもゆえなきにあらず。中古の義に、

はちまん

ごたくせん

あみだぶつ

もう

あるいは八幡の御託宣とて、阿弥陀仏と申しけること

しようしようそうろう

各

こころ

ねんぶつしや

そうろうゆえ

少々候。これは、おのおの心の念仏者にて候故に、

いし　こがね　おも　株　兎　み

あかき石を金と思い、くいぜをうさぎと見るがごとし。そ

じつ　しゃかぶつ　そうろう　ゆえ　おおすみのくに

れ実には釈迦仏にておわしまし候ぞ。その故は、大隅国

しゃくたい　めい　もう　ひと　いし　破　ふた

に石体の銘と申すことあり。一つの石われて二つになる。

ひと　いし　はちまん　もう　に　じ　ひと　いし　めい

一つの石には「八幡」と申す二字あり。一つの石の銘には

むかしりようじゆせん　みようほけきよう　と　いましようぐう　なか　あ

「昔靈鷲山において妙法華経を説き、今正宮の中に在

だいぼさつ　じげん　うんぬん　しゃかぶつ　もう　だいいち　しようもん

って大菩薩と示現す」云々。これ釈迦仏と申す第一の証文

なり。

殊　正　そうろう　はちまん　だいいぼさつ

これよりも、ことにまさしきこと候。この八幡大菩薩は、

にほんこくにんのうだいじゆうしだいちゆうあいてんのう　ちち　だいいじゆうごだいじんぐうこうごう

日本国入王第十四代仲哀天皇は父なり、第十五代神功皇后

はは

だいじゅうろくだいおうじんてんのう

いま

はちまんだいぼさつ

は母なり、第十六代応神天皇は今の八幡大菩薩これなり。

ちち

ちゅうあいてんのう

てんしやうだいじん

おお

しんらく

せ

父の仲哀天皇は、天照太神の仰せにて、新羅国を責め

わた

たま

しんら

だいおう

じやうぶく

たま

んがために渡り給いしが、新羅の大王に調伏せられ給いて、

ちゅうあいてんのう

博

多

ほうぎよ

后

じんぐうこうごう

仲哀天皇ははかたにて崩御ありしかば、きさきの神功皇后

たいし

ごかいにん

渡

たま

おう

は、この太子を御懷妊ありながらわたらせ給いしが、王の

かたき

打

すうまんき

勢

相　　ぐ

しんらく

わた

敵をうたんとて数万騎のせいをあい具して新羅国へ渡り

たま

なみ

うえ

ふね

うち

おうじごたんじよう

け出

来　　み

給いしに、浪の上、船の内にて、王子御誕生の氣いでき見え

たま

とき

じんぐうこうごう

胎

うち

おうじ

語

たま

給う。その時、神功皇后は、はらの内の王子にかたり給う。

なんじ

おうじ

によし

おうじ

確

き

たま

われ

「汝は王子か、女子か。王子ならばたしかに聞き給え。我

くん ちち ちゅうあいてんのう かたき う しんらくこく わた

は君の父・仲哀天皇の敵を打たんがために新羅国へ渡る

わ み によ み なんじ たいしよう 侍

なり。我が身は女の身なれば、汝を大将とたのむべし。君、

にほんこく しゆ たも こんどう たま

日本国の主となり給うべきならば、今度生まれ給わずして、

いくさ あいだ はら うち すうまんき たいしよう ちち かたき う

軍の間、腹の内にて数万騎の大将となりて父の敵を打

たま もち たま ただいまう たも

たせ給え。これを用い給わずして只今生まれ給うほどなら

うみ い たてまつ われ うら おも たも

ば、海へ入れ奉らんずるなり。我を恨みに思い給うな」

おうじ もと たいない 納 たま

とありければ、王子、本のごとく胎内におさまり給いけり。

とき いし 帯 はら 冷 しんらくこく わた たま

その時、石のおびをもつて胎をひやし、新羅国へ渡り給い

しんらくこく う 従 かえ ぶぜんのに 宇 佐 みや 着

て新羅国を打ちしたがえて、還つて豊前国うさの宮につき

たま

おうじたんじよう

給い、ここにて王子誕生あり。

かいたい

のちさんねんろくがつみつか

もう

きのえとら

とししがつようか

う

懐胎の後三年六月三日と申す甲寅の年四月八日に生ま

たも

おうじんてんのう

ごう

たてまつ

おんとしはちじゅう

もう

れさせ給う。これを応神天皇と号し奉る。御年八十と申

みずのえさる

としにがつじゅうごにち

隠

たも

おとこやま

ぬし

わ

す壬申の年二月十五日にかくれさせ給う。男山の主、我

ちよう

しゅごしん

しょうたい

珍

れいけんあら

が朝の守護神、正体めずらしからずして靈験新たにおわ

いま

はちまんだいぼさつ

します今の八幡大菩薩これなり。

しやかによらい

じゅうこうだいく

げん

にんじゅひやくさい

とき

じようぼんおう

また釈迦如来は、住劫第九の減、人寿百歳の時、浄飯王

ちち

まやぶにん

はは

ちゆうてんじくか

びら

えこく

藍

毘

尼

を父とし摩耶夫人を母として、中天竺伽毘羅衛国らんびに

おん

もう

ところ

きのえとら

とししがつようか

う

たま

園と申す処にて、甲寅の年四月八日に生まれさせ給いぬ。

はちじゅうねん へ

ひがしてんじくくしなじようばつだいが

ほとり

にがつ

八十年を経て、東天竺俱尸那城跋提河の辺にて、二月

じゅうごにちみずのえさる

隠

たま

いま

はちまんたいぼさつ

十五日壬申にかくれさせ給いぬ。今の八幡大菩薩もまた

がつし

にほん

ふぼ

替

しがつようか

かくのごとし。月氏と日本と父母はかわれども、四月八日と

きのえとら

にがつじゅうごにち

みずのえさる

ほとけめつど

甲寅と、二月十五日と壬申とはかわることなし。仏滅度

のちにせんにひやくにじゅうよねん

あいだ

がつし

かんど

にほん

いちえんぶだい

の後二千二百二十余年が間、月氏・漢土・日本、一閻浮提

うち

しょうにん

けんじん

う

ひと

みなしやかによらい

けしん

の内に、聖人・賢人と生まるる人をば皆釈迦如来の化身と

もう

ふしぎ

けんもん

こそ申せども、かかる不思議はいまだ見聞せず。

ふしぎ

そうろううえ

はちまんたいぼさつ

おんちか

がつし

かかる不思議の候上、八幡大菩薩の御誓いは、月氏に

ほけきよう

と

しょうじき

ほうべん

す

名乗

たま

ては法華経を説いて「正直に方便を捨つ」となのらせ給い、

にほんこく

しようじき

いただき

宿

ちか たも

日本国にしては「正直の頂にやどらん」と誓い給う。し

い

じゅういちがつじゅうよつか

ねのとき

ごほうでん

焼

てん

かるに、去ぬる十一月十四日の子時に、御宝殿をやいて天

上

たま

ゆえ

勘

そうろう

かみ

しようじき

にのぼらせ給いぬる故をかんがえ候に、この神は正直の

ひと いただき

宿

ちか

しようじき

ひと

いただき

そうら

人の頂にやどらんと誓えるに、正直の人の頂の候わ

こしよ

ゆえ

すみか

てん

上

たま

ねば、居処なき故に、栖なくして天にのぼり給いけるなり。

にほんこく

だいいち

ふしぎ

しやかによらい

くに

う

日本国の第一の不思議には、釈迦如来の国に生まれて、

ほとけ

捨

いっさいしゅじょうみないちどう

あみだぶつ

付

この仏をすてて一切衆生皆一同に阿弥陀仏につけり。

うえん

しやか

捨

たてまつ

むえん

あみだぶつ

仰

有縁の釈迦をばすて奉り、無縁の阿弥陀仏をあおぎたて

うえ

しんぷ

しやかぶつ

にゆうめつ

ひ

あみだぶつ

まつりぬ。その上、親父・釈迦仏の入滅の日をば阿弥陀仏

たんによう

ひ

やくし

はちまんだいぼさつ

につけ、また誕生の日をば薬師になしぬ。八幡大菩薩をば

あだ

ほんじ あみだぶつ

ほんじ

崇むるようなれども、また本地を阿弥陀仏になしぬ。本地・

すいじやく

す

うえ

もう ひと

敵

ゆえ

垂迹を捨つる上に、このことを申す人をばかたきとする故

ちからおよ

たま

かみ てん

上

たま

に、力及ばせ給わずしてこの神は天にのぼり給いぬるか。

つき

かげ

みず

浮

にこ

みず

す

ただし、月は影を水にうかぶる。濁れる水には栖むこと

き

うえ

くさ

は

す

つゆ

うつ

なし。木の上・草の葉なれども澄める露には移ることなれ

こくしゆ

しょうじき

ひと

頭

宿

ば、かならず国主ならずとも正直の人のこうべにはやどり

たも

ひやくおう

いただき

ちか

たま

給うなるべし。しかれば、百王の頂にやどらんと誓い給

にんのうはちじゆういちだいいんとくてんのう

にだいいおきのほうおう

さんだい

いしかども、人王八十一代安徳天皇・二代隠岐法皇・三代

あわ しだいさど ごだいひがしいちじようとう ごにん こくおう いただき 栖

阿波・四代佐渡・五代東一条等の五人の国王の頂にはす

たま てんごく ひと いただき ゆえ よりとも よしとき しんか

み給わず。諂曲の人の頂なる故なり。頼朝と義時とは臣下

いただき たま しようじき ゆえ

なれども、その頂にはやどり給う。正直なる故か。これ

おも ほけきよう ひとびと しようじき ほう 付 たま ゆえ

をもつて思うに、法華經の人々は正直の法につき給う故に、

しやかぶつ 守 たま すいじやく はちまん

釈迦仏なおこれをまぼり給う。いわんや、垂迹の八幡

だいぼさつ たま

大菩薩、いかでか、これをまぼり給わざるべき。

きよ みず にこ つき 宿 ふんすい

浄き水なれども、濁りぬれば月やどることなし。糞水な

澄 かげ お たま じよくすい きよ つき

れども、すめば影を惜しみ給わず。濁水は清けれども月や

ふんすい 汚 澄 かげ 惜 じよくすい

どらず。糞水はきたなけれども、すめば影をおします。濁水

は、智者・学匠の持戒なるが法華經に背くがごとし。糞水ちしや　がくしやう　じかい　ほけきやう　そむ　ふんすい

は、愚人の無戒なるが、貪欲ふかく瞋恚強盛なれども、ぐにん　むかい　とんよく　深　しんにごうじやう

法華經ばかりを無二無三に信じまいらせてあるがごとし。ほけきやう　むに　むさん　しん

涅槃經と申す經には法華經の得道の者を列ねて候に、ねはんぎやう　もう　きやう　ほけきやう　とくどう　もの　つら　そうろう

蜚・蜚・蜚・蠅と申して糞虫を挙げさせ給う。竜樹菩薩はこう　ろう　ふく　かつ　もう　ふんちゆう　あ　たも　りゆうじゆぼさつ

法華經の不思議を書き給うに、「蜚虫と申して糞虫を仏ほけきやう　ふしぎ　か　たも　こんちゆう　もう　ふんちゆう　ほとけ

になす」等云々。また、涅槃經に法華經にして仏になるまとううんぬん　ねはんぎやう　ほけきやう　ほとけ　成

じき人をあげられて候には、「二闡提の人の、阿羅漢のごひと　挙　そうろう　いつせんだい　ひと　あらかん

とく、大菩薩のごときもの」等云々。これらは、濁水は浄だいぼさつ　とううんぬん　じよくすい　きよ

つぎ かげ うつ
けれども月の影を移すことなしと見えて候。
み そうろう

はちまんだいぼさつ 憎 ぶん 上 たも
されば、八幡大菩薩は不正直をにくみて天にのぼり給う

ほけきよう ぎようじや み かげ 惜
とも、法華經の行者を見ては、いかでか、その影をばおし

たも わ いちもん ふか こころ しん たも
み給うべき。我が一門は深くこの心を信ぜさせ給うべし。

はちまんだいぼさつ 渡 たも うたが たも
八幡大菩薩は、ここにわたらせ給うなり。疑い給うことな

うたが たも きようきようきんげん
かれ、疑い給うことなかれ。恐々謹言。

じゆうにがつじゆうろくにち
十二月十六日
にちれん かおう
日蓮 花押